

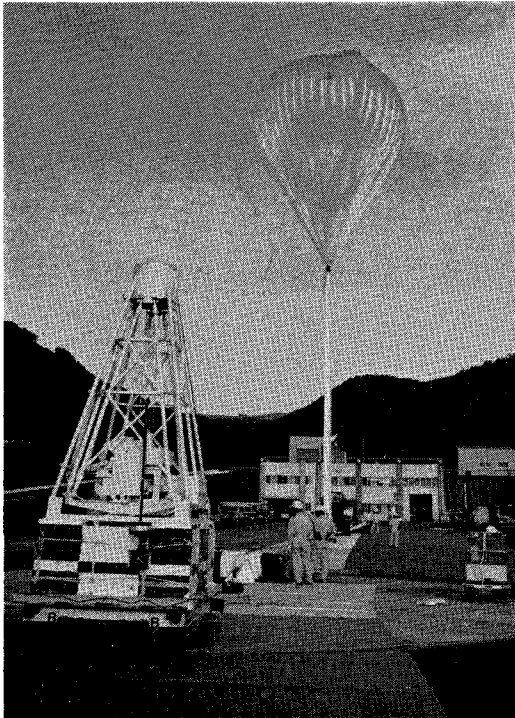
日本の観測所めぐり (2)

三陸大気球観測所

宇宙航空研究所に大気球の部門が設けられ、観測用大気球の開発に本格的に取り組みはじめたのは昭和41年のことである。当初大型気球、搭載機器の開発とならんで最重要項目として恒久観測所の設置があげられている。とはいっても急に恒久的な観測所を設けることはむづかしく、最初の2年間は、鹿島工業地帯の北側の大洋村で、つづく3年間は無線塔で有名な原の町で実験が行なわれた。

まさにプレハブの仮実験場、地面は面が降るとぬかるんで気球を放球するランチャーが人手では動かさず往生したものであった。

航空機の頻度も段々ふえ、安全性の観点からもっと北の方に移ってもらいたいとの関係機関の要望もあり、色



指令棟と気球放球作業
(手前のゴンドラは太陽望遠鏡です)

々な角度から検討した結果、岩手県気仙郡三陸町吉浜に恒久観測所が出来上ることとなった。観測所は三陸国立公園の近くにあり、景観は抜群である。リアス式海岸の特長である山と海岸線が混在し、山をきりひらいて観測所が作られた。観測所の主体をなす放球場は約130m幅20mの滑走路ようになっており、中央に直径12mの回転テーブルがそなえつけてある。これに気球のランチャーがとりつけられており、放環の際地上の風向にあわせて回転させる。

放球場の端に指令棟があり、気球の放球、浮力注入のコントロール、観測器の準備を行っている。放球場から約1kmはなれた小山の上に気球からの電波をうける受信所がある。1.6GHzの2m直径のパラボラ2台と、コマンド送信機がおかれている。現在3kmはなれたやや高い山の上に受信点を新設中で、これが完成すると北はほぼ北海道全土、南は東京付近迄カバーできることになる。

気球の実験場としては世界で最も小型であるが、充実度はこれに反して最も高いと考えている。

この観測所が出来てから放球した機数は約300機、長時間フライトシステムの開発、何秒角という精密な方向制御システムも完成して、三陸の名は世界の気球関係者の間では著名な場所となっている。

上野から新幹線で一の関下車、大船渡線で大船渡まで行き、三陸縦貫鉄道に乗りかえ吉浜駅をおりると、目の前の山の中に観測所がある。あるいは釜石まわりで来られることも可能である。交通の便を考えると或は車でこられるのがよいのかもしれない。宿はいくつかあって魚は新鮮でおいしい。

5月、9月は気球実験の時期で実験班が数十名つめかけている。これ以外の時期には職員の方が2名観測所の保守にあたっている。御来訪があればこの方々が御案内することになると思う。

宇宙科学研究所
(西村 純 記)

昭和61年1月20日	発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町585-12	啓文堂 松本印刷
定価 450円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話 三鷹31局(0422-31)1359	振替口座 東京 6-13595